

最澄に於ける円戒受容の問題

山崎 欣 弥

序

伝教大師最澄が梵網戒を受容するにあたって小乗戒を棄捨したことは、それまでおこなわれていた菩薩戒の受持方法と大きく異なるものであった。そこには最澄独特の戒思想が伺えるが、同時に又、その円戒をめぐる問題も生じてくるのである。その当時南都各宗でおこなわれた受戒法は、出家・在家は共に通受として菩薩の三聚浄戒を受けるが、別受としては出家・在家のそれぞれの分に相応した戒を四分律の制に従って受けるというものであった。したがって最澄が主張する如く、梵網戒のみで出家受戒した場合、在家・出家の区別が判然としなくなる、天台の小戒共受の伝統に悖る、法華開頭に背く、等々の問題が生じてくる。本論では、これらのことを中心に、最澄の小乗戒棄捨、梵網戒単受に対する私見を述

べてみたい。

一

最澄が『梵網經』を理解する上で、明曠の『天台菩薩戒疏刪補』を重要な依り処としたことは、『顕戒論』での引用や、両者の梵網戒解釈の接近などから容易に伺い知ることができよう。明曠の『梵網經』解釈は、自ら「今從仏意円教消釈」^①と言う如く、天台の伝統的解釈である別円菩薩の戒としてよりも、円教菩薩の戒として理解している。天台家に於る『梵網經』の註疏には、智顗の作とされる『菩薩戒義疏』二巻がある。明曠は刪補するにあたって、自らの立場が先見に従うことを示して、今随所欲直筆銷文。取捨有憑不違先見。則以天台為宗骨、用天宮之具縁^②。

といっている。天台を宗骨とするといいいながらも、明曠

の『刪補』と智顗の『疏』との間には相違が認められる。その中でも特に注意を引くのは、『智度論』の十戒に対する両者の解釈の違いである。

『智度論』の第八七巻で説かれる戒の中から、不欠・不破・不穿・不雜・隨道・無著・智所讚・自在・隨定・具足の十戒を取り出し、この十戒により一切の戒を統攝しようとするのに、智顗の『疏』では、

不欠者、持於性戒。性重清淨如護明珠。若毀狂者如器已欠、仏法辺人也。不破者、持於十三無有破損也。不穿者、波夜提等。若有所犯如器穿漏、不堪受道也。不雜者持定共戒。雖持律儀念破戒事名之為雜。定共持心欲念不起。大經云、言語嘲調、壁外鉏声、男女相追、皆汚淨戒也。隨道者、隨順諦理能破見惑也。無著者、見真成聖、於思惟惑無所染著。此兩約真諦持戒也。智所讚戒、自在戒、約菩薩化他。為仏所讚於世間中而得自在。此約俗諦論持戒也。隨定、具足兩戒。即是隨首楞嚴、不起減定現諸威儀、示十法界像導利衆生。雖威儀起動任運常淨。故名隨定戒。前來諸戒律儀防止名不具足。中道之戒無戒不備。故名具足。用中道慧遍入諸法。故名具足。此是持中道第一義諦戒也。^③

と、十戒を律儀・定共・道共の三戒に分類し、律儀戒である不欠・不破・不穿の三戒に対して声聞戒を当てている。

これに対して明曠の『刪補疏』では、

此三聚戒、依大智度論義通十種。一不欠、謂持十善性戒乃至十重。若毀欠者無堪受用。二不破、三不穿、即四十八輕。若毀犯者如器破裂及穿漏也。四不雜念、即欲念不起也。五隨道、六無著、謂見真諦理離三界內見思惑也。七智所讚、八自在、此約菩薩利他、為智人所讚。九隨定、十具足、約証中道、首楞嚴禪。不起減定現威儀、示十界身隨形化物也。^④

と、三聚により分類するとして、その摂律儀戒と考えられる不欠・不破・不穿の三戒に、十善乃至十重と四十八輕戒を取り入れている。智顗が梵網戒を『智度論』の十戒中、どの戒の攝としたかを考えてみると、初期の著作とされる『釈禪波羅蜜次第法門』には、十戒中第七智所讚戒に対して、

七持智所讚戒。發菩提心為令一切衆得涅槃故持戒。如是持戒則為智所讚歎。亦可言持菩薩十重四十八輕戒。此戒能至仏果故為智所讚歎。^⑤

といっている。ここに示される菩薩十重四十八輕戒とは

梵網の十重四十八輕戒を指すことは明らかであるから、智顗は梵網戒を第七智所讚戒の撰であると考えていたことがわかる。

宝地房証真の弟子とされる円淋が智顗の『疏』を註釈した『菩薩戒義疏鈔』には、十重四十八輕戒が十戒中いずれに属するかを検討し、

応は初三律儀撰也。然約篇聚消积大論初三戒者、律儀本在篇聚故也。何妨亦以菩薩律儀属其中耶(中略)

以論十戒分封三聚、是非初三亦是菩薩撰律儀耶。

といっている。智顗は律儀戒が小乘篇聚戒に基づく所から初三戒に対して篇聚戒を当てているが、もし菩薩の三聚律儀によって論の十戒が解釈されたならば、初三戒に撰律儀としての十重四十八輕戒が当てられるというのである。しかし円淋はこの答に続き

又一解云応は出仮入中戒撰。大師諸文只約篇聚制、不欠等律儀戒相不云亦撰菩薩戒也。不雜事定、入空見修太違円違。故以諸戒撰十戒時分別四教。応は尽理。而於入仮入中戒中可撰別円菩薩戒也。

といって、この十戒に於て四教の分別がなされることから、入仮入中の戒に別円菩薩の戒としての梵網戒が撰められることを示している。又、

故知今經發大心已所持。經重既在別円不濫小。故在廻向支。於十戒是後五戒。論十戒中後四戒也。又十二願在廻向。今十三願必是其撰。其餘輕重豈不然也。

といって、『梵網經』の戒は、『涅槃經』の五支戒中では第五の廻向具足支中に、『涅槃經』の十戒中では第六大乘戒より後の五戒中に、『智度論』の十戒中では第七智所讚戒より後の四戒中に、それぞれ撰められるとし、又、『法華玄義』に、

廻向具足無上道戒者、即是菩薩於諸戒中具四弘六度。發願要心廻向菩薩。又大乘戒(中略)又別發願要制己心。寧以此身臥於熱鉄不以破戒受他牀席。十二誓願自制其心。

といっているのは明らかに『梵網經』の十三願を念頭に置いた説であると述べている。これらの説は、智顗が『次第法門』で、梵網戒を出仮入中以上の菩薩が受持する戒としていたのとはば一致している。

『菩薩戒義疏』では、

於三教中即是頓教。明仏性常住一乘妙旨。所被之人唯為大士不為二乘。華嚴云二乘在座不知不覺。

といって、『梵網經』は直ちに菩薩大士の為に説かれたものとして、天台化儀中、頓教の撰とされ、『法華玄義』

でも、

開顯頭妙者、他云梵網是菩薩戒。今問是何等菩薩戒。彼若答言是藏通等菩薩戒者、応別有菩薩衆。衆既分別、戒何得異。又若別明菩薩戒者、何等別是緣覺戒。今明三藏三乘無別衆、不得別有菩薩緣覺之戒也。若作別円菩薩解者可然。何者三乘共衆外別有菩薩。故別有戒。^⑭

といつて、梵網戒は三乘共衆の藏教・通教の戒でなく、別教・円教の菩薩のために説かれた戒であるとしている。藏教・通教がおのの析法・体法によつて真諦を觀じるに對して、別教・円教は隔別・円隔の相違はあるものの孰れも中道を諦觀としている。化法の四教中、中道を知り得るのは通教の出仮、即ち体空により但中を知る別接通、体空により不但中を知る円接通以上に於てであり、梵網戒をこのように出仮以上の菩薩が持つ戒とすることは、中道を修する菩薩が受持するのは梵網戒であるということを暗に認めているようにも思われる。

明曠も、

今此戒經結華嚴會。即別円教輕重頓制菩薩律儀。^⑮といつて、智顗と同様、梵網戒が別円兩教の菩薩のために説かれた戒であるとしながらも、『智度論』の十戒に

つゝては三聚円融の立場から初三戒に梵網の十重四十八輕戒を攝めたことは興味深い。円淋は

明曠・智達大師疏不依用。所以大師只約篇聚聚不欠等。而云十戒通用為根本也。何云不欠即十善耶。^⑯

といつて、明曠が初三戒に十重等を攝めていることは、智顗が『摩訶止観』で『智度論』の十戒に對して、「此十通用性戒為根本」というのに反するものであると、明曠に對する非難を述べている。円淋の説はともかくとして、十戒を三聚説で攝めようとしたことは、梵網戒を別円でなく円教として解釈しようとした明曠の意図がよく現われているといえよう。

今更に明曠の説からその円意を考察すると、『刪補疏』には、『智度論』の十戒について、

問如前十戒乘戒互通。如何取別。答制教所明從禁惡邊而得戒名。化教所明從修禪學慧而立乘稱。此則別也。^⑰

といつて、別義としての制教と化教による戒と乘の區別を認めながらも、通義としては、

今菩薩戒三聚互通。從制止惡名之為戒。從制起行常住慈悲則是乘也。故知戒戒三聚互通。三觀三身相即。三聚三身既無優劣。四十八輕十重等持心性寧有淺深。

仮分乘戒兩名。一一無非実相。方是円融菩薩戒也。^①

といっている。これから判断するならば、明曠は別義としての戒乗の各別説よりも、通義としての三聚互通説から『智度論』の十戒を理解したようである。三聚と三字・三觀・三徳・三身・四弘誓願との結びつきを説く三聚互融の教義から『智度論』の十戒が理解されることによつて、不欠等の三戒に梵網の十重四十八輕戒が摂められるのである。円淋は、

円頓止觀第三云、前四威儀、次四摂衆生、後二摂善法戒。^②

と、『円頓止觀』にも三聚による『智度論』の十戒解釈がなされていることを示している。『円頓止觀』は『摩訶止觀』の成立以前にまとめられた智顗の著作とされるから、明曠の三聚による『智度論』の十戒解釈は、あるいは『円頓止觀』に従ったのかもしれない。十戒解釈に於て、智顗の主な著作中では遍学の立場から小乗に説かれる定共・道共により解釈され、『刪補疏』や『円頓止觀』では小乗に説かれない三聚説に従つて解釈されていると思われる。殊に明曠が第一不欠戒に十善乃至十重を摂めたことは、『瓔珞經』の摂律儀戒である十波羅夷との關係を想起させるものがある。

梵網の十重四十八輕戒について、智顗は出仮以上の菩薩が受持する別円菩薩の戒とし、明曠は三聚との互融説から乗戒一致を説き円教の戒としての地位を与えている。それではこの両者の説が最澄にどのように受け継がれているのか。『顯戒論』では、小律儀を共にする藏通兩教の菩薩に対して、小律儀を共にせず梵網戒のみを受持する別円の菩薩が強調される。これからすれば、智顗の説を継承しているとも考えられる。しかし、『顯戒論』には「請円三学」^③といい、

円教三学未具足。二学雖芽未戒学。^④

と述べている。又、

夫此十重戒雖先伝授然但有其名未伝其義。何以得知未伝其義乎。然未解円義故猶共小儀故。^⑤

と、小儀をまじえた迂廻道に終始する南都の受戒態度は、円戒を知らないためであるといっている。又、『註無量義經』に「虚空不動」の三学を示しているのは、明曠等の三聚互融説を受けたものといえよう。

最澄の梵網戒解釈は、智顗の別円説と明曠の円義説とを巧みに取り入れているが、『顯戒論』に、

今約一乘菩薩等由何無別菩薩僧。是故可有大小之二僧。^⑥

ということから理解されるように、小乗律と大乘律とを隔別し、化他のために仮受する以外は小乗戒を棄捨するというものである。成程智顗は、小乗戒を受持する藏教・通教の三乗集団の他に、梵網戒のみを受持する別教・円教の菩薩集団があることを認めている。しかし、『法華玄義』に、

三帰五戒十善二百五十皆是摩訶衍。豈有曠戒隔於妙戒。²⁴

とあるように、円戒は開顯により一切の戒を絶待戒とするものでなければならぬ。又、智顗はその伝記に示される所では、篇聚戒を厳守したようである。明曠も、法華開顯人滅円殊途同帰。何小之有。²⁵

といい、又、

出家二衆初稟四分律儀²⁶

といって、出家者の受戒に際して四分律儀を用いることを認めている。したがって出家僧も梵網戒のみで受戒するという最澄の円戒思想とは、大きく異なるものといえよう。

江戸時代の学僧大宝守脱が、『法華玄義講述』で、大乘菩薩受得小戒義有多途。別教菩薩竖学四教。故復持小律儀。円教菩薩円中道妙戒此戒無戒不備。以

中道慧偏入諸法何隔小戒。²⁷

といっているように、別教や円教でも小戒を隔てて棄捨することはないのである。即ち『止観輔行伝弘決』に、

戒無大小由受者心期。²⁸

と示されるように、大乘を目指す者も小戒を受けなければならぬとしている。この説に対しては、最澄が小戒を棄捨したのは天竺の一向大乘寺の制に従い直道を進んだからであり、中国では大小兼学寺があるものの一向大乘寺がないために迂回道をとったということが言われている。

『智度論』の十戒に対する三聚説といい、三聚円融説といい、明曠には最澄へと直接繋がる梵網戒思想があるが、三聚説は不通小乗としているのであって、小乗戒そのものを否定する考え方はみられない。三聚と三学等の一致も、円教の円融面に力点を置いた説として解釈すべきであり、この三聚の円融思想こそ、小乗に通じない円戒の特色である。即ち乗戒の一致による戒解釈は、道共戒・定共戒を説く小乗戒にも認められるが、小乗の乗戒は円融することはない。これに対して円教では乗戒が円融するのであり、これが円戒としての梵網戒の特色となるのである。したがって明曠の円戒は、乗としての止観

とともに円融する戒であるから、それは事戒というよりも理戒に重点が置かれている。それ故、事戒として受持する戒は四分律が中心となる。したがって円教頓悟のための戒とされる梵網戒は、三聚等との円融面において頓悟とされるのであって、これは理戒として梵網戒を把握することにより、最澄の如くであり、最澄の如くに事戒として梵網戒のみを受け、小乗戒を無視することは、明曠の戒思想中からは考えられない。

明曠のように梵網戒を理戒としてみる傾向は智顗にもみうけられるが、第六祖湛然では出家菩薩も小乗律儀を受けなければならないとの、事戒重視の傾向が強い。

『止観輔行伝弘決』には、

五篇七衆竝是出家菩薩律儀。²³

と説かれ、『法華玄義釈義』には、

別円両教云於梵網。若出家菩薩全用白四。而為護他

加制六夷与小異耳。²⁴

と述べられているのは、明らかに最澄の不二乗の梵網戒と相反する考え方である。

智顗、明曠は、三聚の小乗に通じない点から、又、乗戒一致の理戒である点から、梵網戒の意義を認めている。しかし、實際上の受戒に於ける諸威儀については、声聞

戒に頼らざるをえないのである。特に出家僧である限り篇聚戒は不可欠であり、湛然の事戒重視の立場からすれば、梵網戒は小乗戒の上に化他の戒として加制されるものであるとされる。したがって最澄のように梵網戒単受により声聞戒を棄捨するようなことは、中国天台の伝統からは考えられない主張であったといえよう。

二

現実の修道上での威儀作法というよりも、菩薩の心のあり方に中心を据えたのが菩薩戒であるならば、観心と戒とを一致させた三学一体の戒を、理戒としてでなく事戒として受け、声聞戒の威儀を無視した場合、相当の不都合が生じると思われる。このことに関しては、南都側からかなり強い批判があったであろう。『頭戒論』に引用される僧綱の奏文には、

声聞僧尚有二百五十戒三千威儀。今菩薩僧何以但持

十重四十八輕。

とあり、これに対して最澄は、

地上菩薩八万威儀。地前菩薩随分威儀。何況一分菩薩具分菩薩。謹案梵網經云、我今半月半月自誦諸佛法戒。汝等一切発心菩薩亦誦乃至十発趣十長養十金

剛十地諸菩薩亦誦^{已上}。明知八万威儀通凡聖儀。是

故經云、汝等一切菩薩今學當学已学。如是十戒应当

学敬心奉持。八万意義品当広明^{已上}。明知今菩薩僧

有八万儀。何引三千儀泯八万威儀也^①。

といっている。八万の威儀を受けるについては、その菩薩の位次によって、具分の者、随分の者、一分の者と様々であるが、いづれもその力量に応じて円戒を受持しているのであって、声聞戒の三千の威儀から、八万の威儀を具えようとする円戒を難じることはできないのである。これは最澄の戒觀の特色をよく示すもので、明曠とも、湛然とも相違する所である。明曠の乗戒を一致した理戒としての円意解釈からすれば、たとえ、

五十一位円菩薩乘之律儀也^②。

というものの、八万の威儀は梵網の十重四十八輕戒中に円満に具わらなければならず、八万の威儀の一分乃至具分といったことは考えられないであろう。又、湛然のように八万の威儀を具体的な事戒としてとらえるならば、

『法華文句記』で、

出家菩薩具足堅持毘尼篇聚。大乘教意一切皆然。但護篇聚於梵網八万律儀未為持相。但此土器劣且以小檢助成大機^③。

というように、八万の威儀が伝わらない以上それを助成するために小乗律儀三千の威儀を受ける必要があることになろう。

若し小乗三千の威儀を無視した場合、梵網の戒では細かく規制されていない諸威儀をどのようにするか、という問題が生じてくる。南都側からの追求もこの点に関することが多かったことは、『頭戒論』に、

「開示声聞此丘外別有大乘出家菩薩明拋二十一」

「開示大僧名大小通称明拋二十三」

「開示大小二僧名明拋二十七」

「開示菩薩剃除鬚髮出家修道明拋二十八」

「開示菩薩僧著袈裟明拋二十九」

「開示菩薩受三衣等明拋三十」

といった明拋が提示されていることから容易に理解できる。この中で根本となる問題は、声聞戒を用いることなく菩薩戒のみで出家得道する菩薩僧団が認められるかどうかということであろう。「明拋二十一」には、『梵網經』の「若仏子口自説出家在家菩薩此丘此丘尼」^④の文を引用して、声聞此丘の外に出家菩薩があることを示している。この出家菩薩が、声聞の威儀に従うことのない、声聞と独立した菩薩であることは、「明拋二十七」に、

釈迦文仏無菩薩僧者、但約小乘能化仏説。又云文殊等大菩薩入声聞次第而坐者、和光故。入声聞坐不謂文殊學小乘戒。当知約小釈迦無別菩薩、即藏通意也。

といっていることから理解される。即ち、鹿苑での初転法輪において小乗の釈迦の教化に従った文殊等の菩薩は、本来の大菩薩の位を隠して声聞中に入ったままで、声聞の威儀以外に菩薩の威儀がないのは、藏教・通教の立場だとするのである。『菩薩戒義疏』では、最澄が「明拋二十一」で引用した『梵網經』の「出家菩薩比丘比丘尼」という文に対して、

云云在家菩薩即是清信士女。出家菩薩是十戒具戒。又言比丘比丘尼。一云猶是出家菩薩具戒者耳。亦云是声聞僧尼。

という説明をしている。これに対して、円淋の『鈔』や了恵の『天台菩薩戒義疏見聞』には、出家菩薩の十戒は『山家学生式』中『六条式』に示される「授円十善戒為菩薩沙弥」と相応するものであるといっている。そして、菩薩沙弥が十善性戒乃至沙弥の十戒を受持することを示したのが「十戒」であるから、「具戒」とは菩薩比丘として三聚戒を受持することであると説明している。

ここでいわれる三聚戒は、『瑜伽論』や『地持經』で

説かれる摂律儀に篇聚戒を摂めるものではなく、摂律儀戒として梵網の十重四十八輕戒のみを受けるものである。この梵網の三聚戒のみを受けることによって菩薩比丘となることの経証は、円仁の『顕揚大戒論』に引用された『占察經』により示される。即ち『占察經』に、

其年若滿二十時乃可如上總受菩薩三種戒聚。然後得名比丘比丘尼。

とあることから、菩薩の三聚淨戒を受けたものは、声聞律儀を受けなくても比丘・比丘尼となるのである。『占察經』では、「十根本重戒」、「十根本戒」が強調されている点から、そこで示される三聚説は、摂律儀戒に十婆羅夷を当てる『瓔珞經』系統のものであると考えられる。しかし別の箇所には、

出家之戒名為比丘比丘尼。即應推求声聞律藏及菩薩所習摩訶勒伽藏。

とあり、出家の戒としては声聞律儀を推求する必要があると説かれていた。この点からは、摂律儀に篇聚戒を当てる瑜伽・地持系の三聚説であるとも推察できる。したがって「推求声聞律藏」の箇所を無視し、三聚を受ければ比丘・比丘尼と名づけるという部分だけを取り上げたのでは、声聞律儀を受けない菩薩比丘があることの経証とはなら

ない。覺盛の『菩薩戒通別二受鈔』には、叡山を難じて

彼以占察經為依拋明文。於受戒之軌則猥依彼經、至於隨戒更不任彼經也。即件經說云、即應推求聲聞律藏及菩薩所習摩得勒伽藏。既說可學聲聞律藏。而反違彼經文下、彼律藏所說具戒及白四羯磨等小乘學。全不依學彼戒相。竝不用別受軌則^⑩。といっているのも、肯ける所である。

『梵網經』自体が菩薩戒であり、第八輕戒、第三十二輕戒などに小乗戒を持つことに対する輕垢罪が説かれていることや、智顗自らが別教・円教の菩薩のみが受持する戒であることを認めていることから、この「十戒具戒」の文は、声聞律儀を受ける菩薩とは別の、十善性戒・三聚戒により受戒する出家菩薩について説かれたものであるといった考え方もできよう。しかし智顗は在家菩薩の戒を清信士戒としており、これから判断して、出家菩薩の戒である「十戒具戒」も、小乗の沙弥の十戒及び具足戒と考える方が妥当であると思われる。従って最澄が『梵網經』を証として、声聞戒を受ける出家菩薩の他に三聚戒により梵網戒のみで出家する菩薩僧があるといったことは、智顗の『疏』に従う限りは認められないで

あろう。

三

中国天台では、小律儀を受け仏果に至るのが藏通菩薩であり、梵網戒により直ちに仏果を得ようとするのが別円菩薩であるということを認めながら、何故直往菩薩の戒である梵網戒單受がなされず、日本に於てそれがなされたのか。これに対する叡山の解答は概ね、中国では日本のように円機が熟していなかったため、大小兼學寺の制により小律儀を共にする迂回道を修した、といったものである。

この円機已熟に関連して問題となるのは、最澄の円戒が、円戒といいながらも法華開顯と合致しない点である。法華円教の戒は、小乗戒をそのまま菩薩戒として開顯する絶待戒でなければならない。しかるに最澄は、『顯戒論』で、

法華經云、汝等所行是菩薩道。最勝王經云、欲求阿耨菩提当行声聞独覺之道。即知、小律儀外更無大律儀。但所護持有麤有細。

という南都の秦文に対して、

汝等所行是菩薩道者、当知、不是直往菩薩之行、是

回小入大菩薩之行也。夫学神通乘者何用羊象乘。明知、今所引經文開漸悟行。又最勝王經当学二乘道者、是亦漸悟菩薩行。不宜頓悟菩薩之行。即知、小律儀外更有大律儀。

と応酬して、法華開頭に從うのは漸悟迂回道菩薩であるといっている。南都側が小律儀に執して、直往菩薩のため、の別円戒を受けないことは、『顯戒論』に、

羊乘与象乘雖不求小果、遂墮二乘地病行一万劫。比国之比丘之雖無求小果、求声聞威儀。是則求小因。寧不回小果。

と述べられるように、仏果を得られないわけではないが、小果に墮するおそれがあるといっている。

又、『顯戒論』に、

賜白牛車朝不用三車。得家業夕何須除糞。

といい、又、

法体雖一味隨機有淺深。一乘雖無对未開教有余。今依法華制暫隔求小因也。

といっているのは、開頭の後には小律儀を受けないということを示すものである。このように最澄の円戒は、小乗戒を選別した後に円戒として梵網戒を受持しようとするもので、待範の後に示される円の妙であって、開頭によ

り示される円意とは異質のものである。即ち藏通の範戒に待して、別円の梵網戒の妙が説かれ、次第行別教の範に待して、円頓戒である梵網戒の妙がいわれるのであって、法華開頭の円とはいえないであろう。これは天台の教判中、相待妙に相応するもので、最澄は不共小乗の立場上、絶待妙を無視したとも考えられる。このことは、安樂律一派により盛に強調される。最澄が小乗戒を棄捨したのは、法相宗との對抗上、天台の相待判釈に從って円教の優位を述べたのであって、絶待判釈に從ったならば、最澄も小乗戒を受持することを認めた、というのがこの派の主張である。しかし、法華開頭に從うのは漸悟であって頓悟ではないといっている点から考えて、最澄は絶待判釈に於ても小乗戒の受持を認めないと考えられる。

この一派と相反する江戸時代の学僧真流は、『顯戒論闡幽記』で、

天台立待絶二戒者、法華之中会三乘權帰一乘実。故立此二妙、相待論判、絶待論開也。如大師所立、所被機縁既是大直行而非漸悟行也。何以待絶致難。

といって、円戒は待絶の二妙から説かれるべきものではなく、小から大へ次第していく漸悟の者と、小に依らず

直に大へ向う頓悟の者があるうち、後者のために説かれるものであるとしている。しかし、このように漸悟と頓悟の区別をし、漸悟よりも頓悟が強調されるとき、法華円教としての色彩が薄れるように思われる。

それでは、法華開顯に對する最澄の真意はどこにあるのか。『顯戒論』に、

僧統奏曰、然法華一乘初為声聞。故三周說終利小機已上奏文。

論曰、小機時熟為小乘。若大機熟為說大教。未聞為小機三周說一乘。恐章疏診也。法華三周說円一乘終利大機皆与仏記。所以四十余年不顯說者、皆由大機未純熟故。經云、所以未曾說說時未至故。豈不待大機哉。今僧統云、初為声聞故三周說終利小機、深足可怪也。^④

といっているのは、法華での三周説は小機の為に説かれたのではなく、小機が小乗の教えを受けた後、大教を受け得る段階に於て説かれたものであることを示している。これからすれば、已に円機が熟し、法華一乗の眞実教を受ける状態にあるにもかかわらず、南都側特に法相宗の態度は方便として説かれた三乘眞実説に終始して、直道である一乗円教を無視するものとならう。したがって、

最初から法華での開顯をたのみとして、自らは有余教を受け小乗律を共受するのは、漸悟迂回道を進むことになる。最澄が南都の開顯を迂回道としたのは、ここにあると思われる。それ故、法華円教により直道を進む初業菩薩は、『法華經』の「安樂行品」の制に従い、小乗律を隔てなければならぬ。しかし、開顯の後是小律儀を受けないというのは、法華開顯が一切の戒に對して妙戒としての価値をもたせることから、天台の意に反するものといえよう。

結

智顗は梵網戒を別円菩薩の戒とし、明曠は円教五十一位の菩薩の戒として、孰れも声聞を共にしない菩薩の戒としながらも、現実の受戒に際しては小乗戒を依用している。これは、智顗、明曠ともに、梵網戒を乗戒一致の理戒として考えていたからであり、梵網戒を事戒として十重四十八輕のみを受持する最澄の説との間には、大きな隔りがある。しかも梵網戒だけでは、出家者の威儀に関する事項が少なく、小乗律儀をまじえない菩薩僧の集団があることを証明する必要も生じる。

このような難題があるにもかかわらず、最澄が梵網戒

単受に踏み切ったのは、一宗としての真の独立を図るためであったと思われる。法相宗との三一論争を通して、法華一乗の意義を深め、円教の三学の実践をめざしたのである。しかし、法華円教の優位が示される程、その開顯説が後退したのも事実である。

小乗戒棄捨、梵網戒単受という最澄の戒学は、その後の叡山仏教に大きな問題を提示したが、それが又、天台宗の日本的開化へとつながるのである。

註

- ① 大正蔵 第四十卷 五八一頁 c
- ② 同 五八〇頁 b
- ③ 同 五六三頁 a
- ④ 同 五八〇頁 c—五八一頁 a
- ⑤ 同 第四十六卷四八四頁 c
- ⑥ 大日本仏教全書 第七十一卷 一五頁下
- ⑦ 同 一六頁上
- ⑧ 同 一六頁下
- ⑨ 大正蔵 第三十三卷 七一七頁 a
- ⑩ 同 第二十四卷 一〇〇七頁には、「復作是願。寧以此身臥大猛火羅網熱鉄地上終不以破戒之身受信心檀越百種床座。」とあり。
- ⑪ 同 第四十卷 五六九頁 b
- ⑫ 同 第三十三卷 七一七頁 c
- ⑬ 同 第四十卷 五八一頁 c

- ⑭ 大日本仏教全書 第七十一卷 一六頁上
- ⑮ 大正蔵 第四十六卷 三六頁 a
- ⑯ 同 第四十卷 五八四頁 a
- ⑰ 同 五八四頁 b
- ⑱ 大日本仏教全書 第七十一卷 一七頁下
- ⑲ 伝教大師全集 第一卷 三五頁
- ⑳ 同 一九七頁
- ㉑ 同 一〇九頁
- ㉒ 同 第三卷五八三頁
- ㉓ 同 第一卷一一六頁
- ㉔ 大正蔵 第三十三卷 七一八頁 a
- ㉕ 同 第四十卷 五九九頁 c
- ㉖ 同 五九九頁 c
- ㉗ 天台大師全集 法華玄義 第一卷 五九九頁
- ㉘ 大正蔵 第四十六卷 二五五頁 a
- ㉙ 同 二五五頁 a
- ㉚ 同 第三十三卷 八七三頁 b
- ㉛ 伝教大師全集 第一卷 一一三頁
- ㉜ 大正蔵 第四十卷 五八二頁 a
- ㉝ 同 第三十四卷 三四三頁 c
- ㉞ 同 第二十四卷 一〇〇四頁 c
- ㉟ 伝教大師全集 第一卷 一一五頁
- ㊱ 大正蔵 第四十卷 五七三頁 b
- ㊲ 伝教大師全集 第一卷 一二頁
- ㊳ 大正蔵 第七十四卷 六八一頁 b
- ㊴ 同 第十七卷 九〇四頁 c—九〇五頁 a

④0

同 九〇四頁c

④1

日本大藏經 第三十五卷 五一〇頁

④2

伝教大師全集 第一卷 一四九頁

④3

同 一三七頁

④4

同 二七頁

④5

同 八八頁

④6

天台宗全書 第十七卷 一三八頁上

④7

伝教大師全集 第一卷 一三八頁